

持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

制定	平成 12 年 3 月 1 日	農営第 721 号
改正	平成 17 年 3 月 14 日	農営第 729 号
改正	平成 18 年 12 月 1 日	農営第 544 号
改正	平成 19 年 3 月 30 日	農営第 727 号
改正	平成 20 年 2 月 1 日	農営第 601 号
改正	平成 21 年 3 月 5 日	農営第 683 号
改正	平成 22 年 3 月 2 日	農営第 685 号
改正	平成 23 年 2 月 22 日	農産第 1035 号
改正	平成 24 年 3 月 1 日	農産第 1158 号
改正	平成 25 年 2 月 26 日	農産第 1098 号
改正	平成 26 年 2 月 13 日	農産第 1118 号
改正	平成 27 年 2 月 25 日	農産第 1136 号
改正	平成 29 年 2 月 8 日	農産第 1040 号
改正	令和 3 年 2 月 8 日	農産第 1093 号
改正	令和 4 年 3 月 22 日	農産第 1186 号
改正	令和 5 年 3 月 24 日	農産第 1340 号
改正	令和 5 年 10 月 24 日	農産第 828 号
改正	令和 7 年 2 月 28 日	農産第 1072 号

「持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針」を次のとおり定める。

第1 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容については、県内を、岡山平野、吉備高原、津山盆地、中国山地の4区域に区分し、各農作物について、その適応区域を定める。

なお、各区域の自然的条件は次のとおりで、これら自然的条件をもとに、市町村の境界を優先して別図のとおりとする。

自然的条件	岡山平野	吉備高原	津山盆地	中国山地
(1) 地形	平坦地	丘陵、台地	平坦地	高原、山麓
(2) 標高	100m未満	200m～500m	100m～200m	500m以上

(3)年平均気温	14℃以上	12～13℃	13～14℃	13℃未満
(4)年降水量	1,300mm未満	1,300mm ～1,500mm	1,300mm ～1,700mm	1,700mm以上

各農作物における持続性の高い農業生産方式の導入にあたって、共通事項として次の点に留意すること。

(1) 有機質資材施用技術

たい肥等の有機質資材の投入にあたっては、土壌診断に基づいて、土づくりの目的に合致した資材を選択する。

たい肥はその原料によって、含まれる肥料成分の含有量が異なる。このため、たい肥の多量施用もしくは連用は、特定成分の過剰蓄積や塩基バランスの崩壊の恐れがある。土壌診断に基づいて足りない成分を補うようなたい肥を選択する。

(2) 化学肥料低減技術

農作物ごとに記載された低減技術の手法が複数ある場合、可能なものについては、それらを組み合わせて、化学肥料の低減を図る。

たい肥の施用によって持ち込まれる肥料成分については、化学肥料等の施肥量からこれを減ずる。

(3) 化学農薬低減技術

気象条件や病害虫等の発生に対応して、ここで掲げた技術以外の耕種的手法等を組み合わせて、化学農薬の低減を図る。

農作物ごとに記載された低減技術の手法が複数ある場合、それらを組み合わせて、できるだけ化学農薬の低減に結びつけることに留意する。

また、生物農薬利用技術やフェロモン剤利用技術については、病害虫の発生前や発生初期の使用を前提とし、処理時期等に留意する。

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

たい肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、資材の成分含有量の把握や土壌の性質について定期的な診断が必要となる。

また、化学的に合成された肥料の低減を図るための局所施肥技術や、肥効調節型肥料及び有機質肥料の施用技術の導入にあたっては、土壌、気象、栽培条件等によって、その肥効発現等が異なることから、地域条件に適合した施肥設計が重要である。

このため、農業普及指導センター及び農協の営農指導組織等の相互の連携の下、土壌診断等の実施並びに土づくりや肥料等に関する情報を提供する体制を強化する。

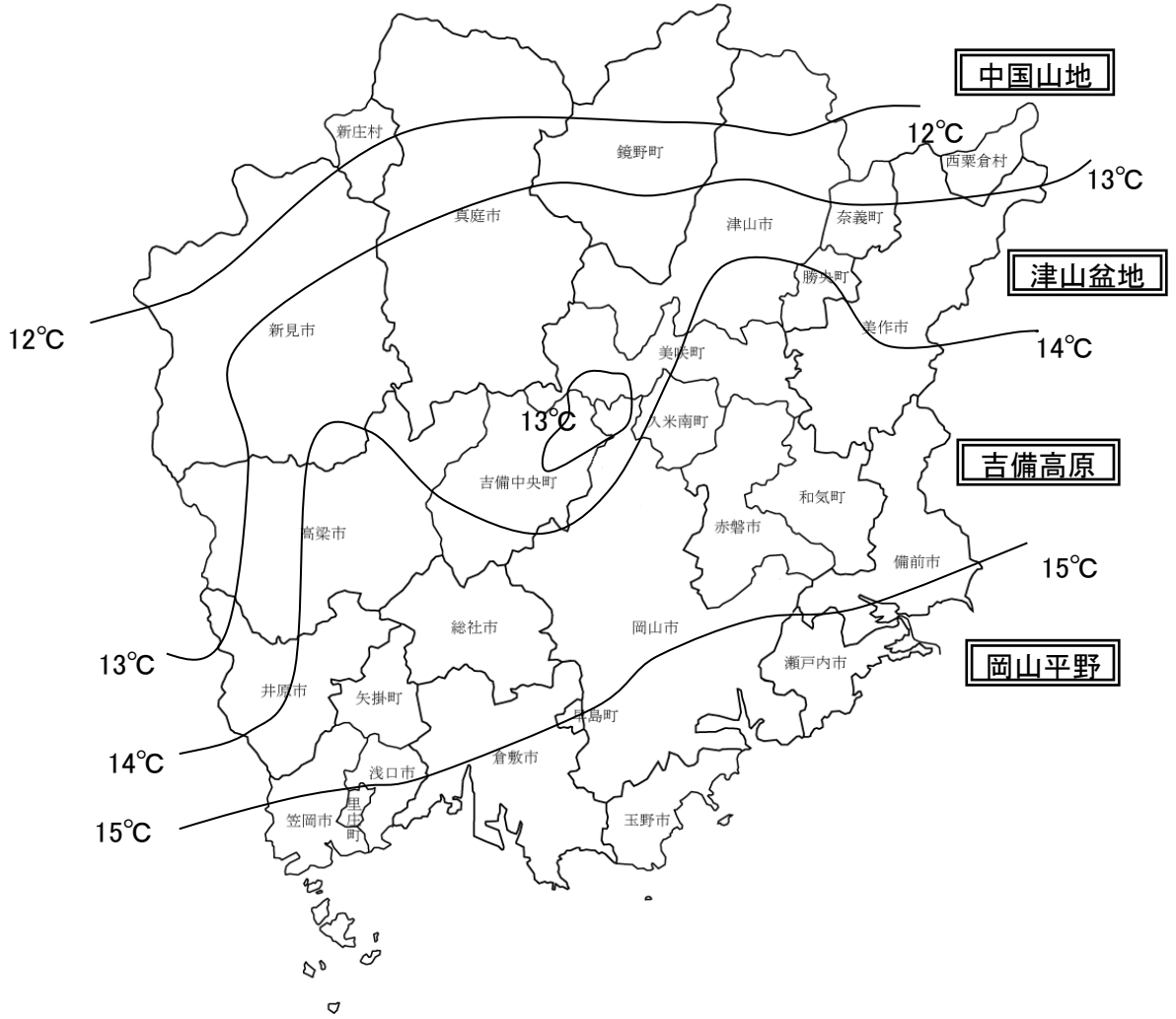
また、優良な有機質資材を確保するためのシステムづくりや条件整備を積極的に推進する。

化学農薬を低減した病虫害防除においては、きめ細かな発生予察情報の提供が一層重要となる。このため、病虫害防除所を中心に農業普及指導センターや営農指導員等の連携の下、各地域におけるより細かな発生予察の実施や防除技術に関する情報を提供できる体制を強化する。また、天敵やフェロモン剤等を利用する化学農薬低減技術については、その効果を最大限に発揮させるため防除技術の開発と普及に努める。

※別表参考欄の慣行レベルとは、特別栽培農産物に係る表示ガイドラインの慣行レベルを基本としている。

(別図)

岡山県区域図



(別記) 持続性の高い農業生産方式の具体的内容及び導入上の留意事項について

1 有機質資材施用技術

(1) 堆肥等有機質資材施用

土壌診断（可給態窒素含有量及び土壌有機物含有量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、たい肥等有機質資材であって窒素成分と炭素成分のバランスのとれたもの（炭素窒素比（C/N比）がおおむね 10 から 150 の範囲となるもの）を施用する技術をいう。

たい肥等有機質資材の範囲としては、たい肥のほか、稲わら、作物残さ等が含まれるものと考えられるが、樹皮及びおがくずについては、炭素窒素比が大きく、作物の生育に障害を与えるおそれがあるので含まれない。

また、施用する種類や量については、土壌診断の結果に基づく適正なものと考えられるものとし、過剰な施用や未熟なたい肥の施用により、作物の生育を悪化させ、又は地下水の汚染等環境に負荷を与えることのないよう留意する必要がある。

(2) 緑肥作物利用

土壌診断（可給態窒素含有量及び土壌有機物含有量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、緑肥作物（農地に有機物や養分を供給するために栽培される作物）を栽培して、農地にすき込む技術をいう。

緑肥作物の種類は限定しないものの、有機物や養分に富み、農地にすき込むものであり、地域に適合したものを選択することが必要である。

また、本技術の導入に併せて合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましい。

なお、選択した緑肥作物の種類によっては、対抗植物としての効果を有するものがあり、この場合は、法第2条第3号の技術である「対抗植物利用技術」を同時に導入しているものとみなす。

2 化学肥料低減技術

(1) 局所施肥

肥料を作物の根の周辺に局所的に施用する技術をいい、水稲作における側条施肥もこれに含まれる。

本技術の導入においては、肥料による作物への濃度障害を回避する観点から、農作物の種類、肥料の種類等に応じて施肥する位置等を調整する必要がある。

また、労働時間の軽減を図る観点から、側条施肥田植機や畝立マルチ施肥機等局所施肥と同時に他の生産行程を行う農業機械を積極的かつ効率的に利用することが望ましい。

(2) 肥効調節型肥料施用

本技術は、普通肥料のうち、いわゆる被覆肥料、化学合成緩効性肥料及び硝酸化成抑制剤入り肥料を施用する技術をいう。

本技術の導入においては、これらの肥効調節型肥料の種類により肥効パターンが異なることを十分考慮し、農作物の種類、土壌条件及び気象条件に応じて肥料の種類を選択する必要がある。

(3) 有機質肥料施用

有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する肥料を施用する技術をいう。

施用する種類や量については、土壌診断の結果、農作物の種類、含有する肥料分量等を勘案して適正と考えられるものとし、過剰な施用や未熟なたい肥の施用により、作物の生育や品質を悪化させ、又は環境に著しい負荷を与えることのないよう留意する必要がある。

なお、本技術で利用される肥料には、いわゆる有機入り化成肥料も含まれるが、上記の二つの技術が、化学肥料の使用を3割程度低減することが可能であることを考慮すれば、有機質由来のものが原料ベースで3割以上含まれているものを使用することが望ましい。

3 化学農薬低減技術

(1) 温湯種子消毒

種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術をいう。

本技術の導入においては、浸漬する温度や時間により防除効果や発芽率等が変動することから、適切な条件の下で行うことが必要である。

(2) 機械除草

有害植物（有害動物の発生を助長する植物を含む。）を機械的方法により駆除する技術をいう。

本技術の導入においては、除草用機械による除草を効率的に行えるよう、農作物の栽植様式の調節やほ場の規模に応じた機械の種類を選択を行うことが必要である。

なお、本技術には、畦畔における有害動物の発生を助長する植物を機械的方法により駆除する技術が含まれる。

(3) 除草用動物利用

有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いをを行う技術をいう。

具体的には、アイガモ又はコイを利用した水稲作が想定されるが、このほか、都道府県農業試験場等で駆除効果が明らかとされた小動物を利用するものも含まれる。

本技術の導入においては、除草用動物が野犬等の外敵の被害を受けないよう、柵等で保護するなど適切な条件で行うことが必要である。

(4) 生物農薬利用

農薬取締法（昭和 23 年法律第 82 号）第 1 条の 2 第 2 項の天敵であって、同法第 2 条第 1 項又は第 15 条の 2 第 1 項の登録を受けたものを利用する技術をいい、捕食性昆虫、寄生性昆虫のほか、拮抗細菌、拮抗糸状菌等を導入する技術及びバンカー植物（天敵の増殖又は密度の維持に資する植物をいう。）を栽培する技術等が含まれる。

本技術の導入においては、害虫の発生密度や施設内の温度湿度等により防除効果変動することから、適切な条件の下で行うことが必要である。

る。

(5) 対抗植物利用

土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術をいう。

対抗植物の種類は限定しないものの、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされ、地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

また、本技術の導入においては、対抗植物の防除効果は特異性が高いことから、防除対象とする線虫等有害動植物の種類に応じて、その種類を選択することが必要であるとともに、合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましい。

なお、対抗植物には、有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する植物のみでなく、有害動植物の土壌中における密度を下げる等の効果が期待される非寄生植物も含まれる。

(6) 抵抗性品種栽培・台木利用

有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術をいう。

抵抗性品種・台木の種類は限定しないものの、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされ、防除対象とする有害動植物の種類や地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

(7) 天然物質由来農薬利用

有機農産物の日本農林規格（平成 17 年 10 月 27 日農林水産省告示第 1605 号）別表 2 に掲げる農薬（有効成分が化学的に合成されていないものに限る。）を利用する技術をいう。

有効成分が化学的に合成されていない農薬とは、有効成分が全て天然物質又は化学的処理を行っていない天然物質に由来する農薬をいう。

本技術は、農薬を利用するため、農薬取締法を遵守した使用が行われるよう十分留意するとともに、利用する農薬については有効成分が化学的に合成されていないものであることを製造メーカーへの問合せ等により確認する必要がある。

(8) 土壌還元消毒

土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいう。

具体的には、畑において、有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続する技術のほか、都道府県農業試験場等で防除効果が明らかにされた技術が含まれる。

なお、土壌を被覆する資材については、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等の環境負荷を与えるおそれがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。また、施用する有機物については、肥料成分を含有していることから、過剰な施肥につながるよう留意する必要がある。

(9) 熱利用土壌消毒

土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいう。

具体的には、太陽熱土壌消毒技術、熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術である。

本技術の導入においては、気候条件や土壌条件等により防除効果変動することから、地域の特性に適合したものを選択することが必要である。

なお、土壌に熱を加える前にその表面を資材で被覆する場合については、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こすおそれがある資材もあることから、その使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

(10) 光利用

有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術をいう。

具体的には、シルバーフィルム等の反射資材、粘着資材、非散布型農薬含有テープ、黄色灯及び紫外線除去フィルムを利用する技術である。

なお、粘着資材の利用と生物農薬利用技術を組み合わせて行う場合は、粘着資材で天敵を捕殺しないよう注意する必要がある。

(11) 被覆栽培

農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術をいう。

具体的には、べたかけ栽培技術、雨よけ栽培技術、トンネル栽培技術、袋かけ栽培技術、防虫ネットによる被覆栽培技術等である。

本技術の導入において、有害動植物による被害を予防する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要である。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こすおそれがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

(12) フェロモン剤利用

農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを利用する技術をいう。

本技術の導入において、害虫の発生密度やほ場の規模等により防除効果が変動することから、適切な条件で行うことが必要であるとともに、併せて発生予察を行うことが望ましい。

(13) マルチ栽培

土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術をいう。

本技術の導入においては、まん延防止効果を維持する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要である。

また、本技術には、わら類、被覆植物によるマルチ栽培技術も含まれる。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こすおそれがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要がある。

(別表)

1 水稻

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・早生 20%以上低減 ・中生・晩生(移植) 30%以上低減 ・中生・晩生(直播) 20%以上低減 ・酒造好適品種 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・早生品種 9(コシカリ 7) ・中生・晩生(移植) 10 (ヒビカリ 12) ・中生・晩生(直播) 10 (ヒビカリ 12) ・酒造好適品種 6
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・早生 30%以上低減 ・中生・晩生(移植) 30%以上低減 ・中生・晩生(直播) 15%以上低減 ・酒造好適品種 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早生品種 18 ・中生・晩生(移植) 18 ・中生・晩生(直播) 20 ・酒造好適品種 18
	機械除草		
	除草用動物利用		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		

2 麦類

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 8
	機械除草		

3 大豆(黒大豆を含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・大豆(黒大豆を除く) 25%以上低減 ・黒大豆 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・大豆(黒大豆を除く) 2 ・黒大豆 3
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

4 小豆

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 7
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

5 そば

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 2
	生物農薬利用		
	フェロモン剤利用		

6 茶

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 64
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		

7 飼料用米

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・食用品種 10 ・専用品種 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 15
	機械除草		
	除草用動物利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		

8 WCS用イネ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・食用品種 10 ・専用品種 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 13
	機械除草		
	除草用動物利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		

9 いぐさ

区域名 岡山平野

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上減低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 51.5
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	土壌還元消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上減低減	化学合成農薬成分回数 14
	マルチ栽培		

10 ささげ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

11 こんにやく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 11
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

12 もも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・露地 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 早生 4 中生 4 晩生 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・露地 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 早生 26 中生 28 晩生 32
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

13 ぶどう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量(kg/10a) ・ピオーネ、巨峰系4倍体品種、2倍体米国系 品種(無核栽培)及び3倍体品種 加温 11 無加温 9 簡易被覆 5 ・シャインマスカット及び2倍体欧州系品種(無 核栽培) 加温 11 無加温 7 簡易被覆 6 ・マスカット・オブ・アレキサンドリア及び有核栽培品種 加温 5 無加温 3
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 ピオーネ、巨峰系4倍体品種、2倍体米国系 品種(無核栽培)及び3倍体品種 加温 23 無加温 24 簡易被覆 27 ・シャインマスカット及び2倍体欧州系品種(無 核栽培) 加温 24 無加温 25 簡易被覆 29 ・マスカット・オブ・アレキサンドリア及び有核栽培品種 加温 16 無加温 22
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

14 みかん

区域名 岡山平野

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・温州 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 9
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・温州 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	除草用動物利用		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

15 なし

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 11
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 38
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

16 キウイフルーツ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

17 いちじく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 —	化学合成農薬成分回数 19
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

18 うめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 17
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

19 かき

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 15
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

20 ブルーベリー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	稲ワラ、もみ穀等	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 7
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 7
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

21 くり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 8
	天然物質由来農薬利用		
	マルチ栽培		

22 なす

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 共通 ・施設 30%以上低減 ・夏秋 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・施設 60 ・夏秋 55
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・施設 30%以上低減 ・夏秋 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・施設 60(うち育苗期4) ・夏秋 23(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

23 トマト

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 26(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

24 ほうれんそう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・冬まき(12月～2月) 25%以上低減 ・その他 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき(6月～8月) 7 ・その他 9
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

25 ねぎ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t(青ねぎ1t) (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・小ねぎ 10%以上低減 ・白ねぎ 25%以上低減 ・青ねぎ 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・小ねぎ 25 ・白ねぎ 32 ・青ねぎ 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・小ねぎ 25%以上低減 ・白ねぎ 15%以上低減 ・青ねぎ 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・小ねぎ 8 ・白ねぎ 24 ・青ねぎ 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培(青ねぎを除く)		

26 かぶ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・小・中かぶ 12 ・大かぶ 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・小・中かぶ 5 ・大かぶ 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

27 しゅんぎく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・摘取り 30%以上低減 ・抜取り 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・摘取り 28 ・抜取り 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・摘取り 10%以上低減 ・抜取り 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・摘取り 7 ・抜取り 4
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

28 こまつな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏播(6月～8月) 7 ・その他 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春播(3月～5月) 5 ・夏播(6月～8月) 6 ・秋播(9月～11月) 5 ・冬播(12月～2月) 6
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
フェロモン剤利用			

29 みずな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 5
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

30 さんとうさい

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
フェロモン剤利用			

31 チンゲンサイ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

32 いちご

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・促成 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・促成 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・促成55(うち育苗期21)
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

33 きゅうり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋50
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋26(うち育苗期3)
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

34 キャベツ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・春播まき(2月～4月) 10%以上低減 ・夏播まき(5月～8月) 30%以上低減 ・秋播まき(9月～11月) 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～4月) 12 ・夏まき(5月～8月) 13 ・秋まき(9月～11月) 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

35 はくさい

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・春まき(2月～4月) 35 ・秋まき(7月～9月) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～4月) 16 ・秋まき(7月～9月) 14
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

36 レタス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・秋まき(8月～11月) 13 ・冬春まき(12月～2月) 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

37 だいこん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・冬春まき(11月～5月) 30%以上低減 ・夏まき(6月～7月) 30%以上低減 ・秋まき(8月～10月) 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・冬春まき(11月～5月) 15 ・夏まき(6月～7月) 15 ・秋まき(8月～10月) 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・冬春まき(11月～5月) 5 ・夏まき(6月～7月) 18 ・秋まき(8月～10月) 12
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

38 にんじん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏まき 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏まき 23
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏まき 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき 12
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

39 たまねぎ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・普通 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・普通 28
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・普通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・普通 18
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

40 かぼちゃ(ソウメンナンキンを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・普通 15%以上低減 ・早熟 20%以上低減 ・抑制 20%以上低減 ・ミニ 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・普通 25 ・早熟 25 ・抑制 20 ・ミニ 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・普通 25%以上低減 ・早熟 15%以上低減 ・抑制 25%以上低減 ・ミニ 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・普通 12 ・早熟 16 ・抑制 12 ・ミニ 22
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

41 ピーマン(パプリカ、ジャンボピーマンを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 育苗 3 ・夏秋 本畑 20
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

42 アスパラガス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり5t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 19
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

43 紅ずいき

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 27
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 5
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

44 ブロッコリー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比	化学肥料窒素成分量 (kg/10a)
	肥効調節型肥料施用	・春まき(2月～3月) 15%以上低減	・春まき(2月～3月) 20
	有機質肥料施用	・夏まき(7月～8月)・秋どり 25%以上低減 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 20%以上低減	・夏まき(7月～8月)・秋どり 23 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 27
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～3月) 10 ・夏まき(7月～8月)・秋どり 16 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 14
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

45 なら

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	・軟化1年目 10a当たり2t (土壌診断に基づく) ・2年目以降 10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比	化学肥料窒素成分量 (kg/10a)
	肥効調節型肥料施用	・軟化1年目 30%以上低減	・軟化1年目 24
	有機質肥料施用	・2年目以降 25%以上低減	・2年目以降 30
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・軟化1年目 10 ・2年目以降 14
	生物農薬利用		
	土壌還元消毒		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

46 とうがん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 24
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早熟 16 ・普通 14
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

47 ズッキーニ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・早熟 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・早熟 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・早熟 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早熟 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

48 バレイシヨ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・春作 5%以上低減 ・秋作 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・春作 15 ・秋作 16
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 10
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

49 スイートコーン

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 27
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

50 ごぼう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・露地春まき 30%以上低減 ・秋まきトンネル 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

51 ミニトマト

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 32 ・促成 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 27(うち育苗期2) ・促成 48(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

52 にんにく(ジャンボニンニクを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 —	化学合成農薬成分回数 20
	生物農薬利用		
	天然物資由来農薬利用		
	土壌還元消毒技術		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

53 トレビス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏まき 20 ・春まき 24
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき 8 ・春まき 6
	生物農薬利用		
	天然物資由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

54 さつまいも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 10
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

55 さといも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 12
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

56 しょうが

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 24
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		

57 やまのいも(ツクネイモ、ナガイモ、ジネンジョ含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 16
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

58 すいか

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 ・共通 慣行比 30%以上 低減	化学合成農薬成分回数 ・露地 18 ・トンネル16
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

59 セルリー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 60
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 20
	機械除草		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

60 いんげん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

61 えんどう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 16
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

62 そらまめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 11
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

63 えだまめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 10
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・大豆(黒大豆を除く)9 ・黒大豆12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

64 しそ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

65 オクラ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

66 コウサイタイ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

67 しろうり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	-
	緑肥作物利用	全量すき込み	-
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

68 なばな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

69 メロン

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・トンネル9 ・施設8
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・トンネル16 ・施設22
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

70 リーフレタス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・秋冬まき 8 ・春まき 6
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

71 れんこん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 54
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・50%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		

72 クレソン

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 16.8
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 3
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		

73 きく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 25
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

74 カーネーション

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 100
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	抵抗性品種栽培・台木利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 39
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		